「家族」に関する日本語語彙のカテゴリー化

山田　仁子

Categorization of Family Members in Japanese

Hitoko YAMADA

Abstract

The purpose of this study is to clarify the process of categorization in mind when Japanese speakers use the terms relating to a family or family members.

This paper presents Japanese expressions composed of two parts: *Hontoh-no* (real / true) and family terms, *Kazoku* (family), *Haha-oya* (mother), *Chichi-oya* (father), *Kodomo* (child), *Musume* (daughter), and *Musuko* (son), and examines these expressions in the contexts in which they appear. Japanese *Hontoh-no* means that the topic is a real or true member of the category classified by the following word, and we can say categorization is happening here. The source of the data is the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), which was developed by the National Institute for Japanese Language and Linguistics, and contains more than one hundred million words of contemporary written Japanese.

Close examination of the examples of *Hontoh-no* and family terms in their contexts show that the term *Hontoh-no* represents two kinds of forces in categorization, “distinguishing force” from some standard to be a category member and “unifying force” aiming at some salient feature of the category. The “unifying force” applies more often to *Kazoku* (family) and *Haha-oya* (mother), than to other family terms, *Chichi-oya* (father), *Kodomo* (child), *Musume* (daughter), and *Musuko* (son). This fact indicates that “family” and “mother” have clearer ideal images than other family members like “father” or “children” in Japanese society.

序

本研究では、日本語において「家族」やその構成員である「母親」「父親」「子供」「娘」「息子」を表す語彙のカテゴリーが、どういった要因により、またどのようなプロセスを経て形成されるのかを明らかにする。

本研究は、山田(2010)(2012)で論じたカテゴリー化の理論を前提とする。それは、語彙カテゴリーとは固定したものでなく、その語彙が実際に用いられる状況（コンテクスト）に応じて柔軟に変化するとするものである。この前提のもとに「家族」に関する語彙を実際の使用場面とともに分析すると、日本語話者が発話の際に「家族」に関してどのようにカテゴリー化しているのかを知ることができる。具体的には、言語使用者が語彙ごとに何をカテゴリーの枠を成す基準としているのか、また何をカテゴリーにとって重要な性質と捉えているのか、更に、基準と重要な性質のどちらをカテゴリー生成の力としているのかといった点について、本研究では明らかにしている。この研究結果は、一般的なカテゴリー化の過程について知るだけでなく、日本語圏における「家族」およびその構成員についての捉え方を知ることにもなる。

今回分析する日本語の資料は、日本国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)より収集した。また本稿の構成は以下の通りとする。まず第１章で「本当の」という語彙がカテゴリー化の過程を知る鍵となることを確認する。続く第２章では「家族」に関する７種の語彙について、それぞれ「本当の」と組み合わせて用いられる例を分析することにより、その語彙カテゴリーの形成過程を探る。最後の第３章では「家族」に関する７種の語彙のカテゴリー形成過程の共通点と相違点について考察する。

１章　「本当の」とカテゴリー化の関係について

日本語の「本当の」という語彙は、カテゴリー化の過程で起きる力を反映することが多く、この語彙が用いられる例を分析することで、カテゴリー化の過程を知ることができる。英語においては Lakoff(1987)が‘Real Mother’に含まれる‘real’を、MOTHER カテゴリーの構造を示すものとして取り上げたが、英語の‘real’に近い意味を持つ日本語の「本当の」という語彙も、日本語の語彙カテゴリーについて知る重要な鍵となるのである。

日本語の「本当の」という語彙の用法をまず確認する。「本当の」は、名詞の前につく場合、大きく分けて次に挙げる２種類の用法がある。

「本当の」の意味用法：

1. 話題の事物の内容が、偽りでなく真実であることを表す。
2. 話題の事物が、後続する名詞のカテゴリーの成員であることを示す。

以下の２つの例はそれぞれこの２種類の用法に対応する意味で、「本当の」が用いられている。

（１）本当の話
（２）本当の問題

（１）は通常「話」の内容が、偽りでなく真実であることを表す。一方（２）は「問題」の内容について真偽を語るものではない。「問題」として重要性を持つということを表す。つまり、「問題」という語彙カテゴリーに確実に組み込まれる成員であることを表すのである。

第２の用法は更に以下の２通りに細分化される。

2a. カテゴリーの境界より内側にカテゴリーの成員として振り分けられることを示す。
2b. カテゴリーの中心的成員として位置づけられることを示す。

2a の例として次の（３）が、また 2b の例として（４）が挙げられる。なお、例文の中で特に問題となる箇所には下線を施した。本稿中の他の例についても同様である。

（３）自分がバカだと認識している人はバカではない。むしろ侮れない相手だ。バカだから一から勉強する。本当のバカは自分が偉いと自惚れている人間だ。　(Yahoo!ブログ)

（４）刑事ってのはな、なまじ学のある馬鹿なんだからな。そのてん、おまえは本当の馬鹿だから、シラを切れるってわけだ。刑事が核心をついてきたら、馬鹿のスに戻って、ボケーッとしてりゃいいの」
（嵐山　光三郎『変！』）

（３）では、「馬鹿（バカ）」カテゴリーの成員となる候補が２つ存在する。

「自分がバカだと認識している人」と「自分が偉いと自惚れている人間」だ。話者は前者を「バカではない」と「馬鹿」カテゴリーの外側へ排除し、後者を「本当の」と取りあげることで、「馬鹿」カテゴリーの内側へと組み込んでいる。２つのカテゴリー成員の候補はカテゴリーの境界の外と内に振り分けられる。この例（３）において「本当の」という語彙は、「自分が偉いと自惚れている人間」の方をカテゴリー境界の内側に振り分けて入れ込む働きをしているのである。

（４）にも「馬鹿」カテゴリーの成員となる候補は２つ存在するが、ここでは２つどちらも「馬鹿」カテゴリーの成員として認められている。「なまじ学のある馬鹿」と「本当の馬鹿」はいずれも「馬鹿」カテゴリーの内にあり、「本当の」という語彙は、「本当の馬鹿」が指し示す人物の方をカテゴリーのまさに中心的成員として位置づけていると解釈される。

2a, 2b といった意味用法を持つ「本当の」という語彙は、語彙カテゴリーの形成過程という観点から見た場合、カテゴリー成員の候補をカテゴリーの中に組み込む２種類の力を反映した表現であり、つまりはカテゴリー化において働く２種類の力の存在を証拠づける表現とも言える。その２種類の力とは、次のようにまとめることができる。

カテゴリー化に働く力：

1. カテゴリーの境界より内側にカテゴリーの成員として振り入れる力
2. カテゴリーの中心的成員として位置づける力

この２種類の力が働くカテゴリー化の過程はそれぞれ次の図１、図２のように図示される。ここで円が表すのはカテゴリーの境界であり、この円の中にカテゴリーの成員が含まれる。星印 ☆ はカテゴリーの中心を示す。

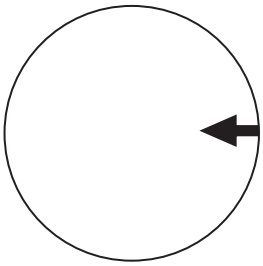

図１

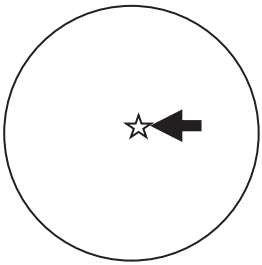

図２

「本当の」という語彙が、カテゴリーの成員であることを示す用法で用いられている時というのは、カテゴリー化が起きている時であり、「本当の」という語彙がこの用法で用いられている文とそのコンテクストを観察すれば、それぞれの語彙カテゴリーが何を境界としているのか、何を中心的なものとしているのか、といったカテゴリーの性質や、コンテクストに応じたカテゴリー化の２種類の力の働き方､またカテゴリーがいかに変化するかなどが明らかになる。

次の２章では、「家族」に関する７種の語彙について、「本当の」と組み合わせて用いられる例を分析しそれぞれの語彙カテゴリーについて探っていく。

２章　「家族」に関する語彙のカテゴリー化

本章では、「家族」に関する７種の語彙、「家族」「母親」「父親」「親」「子供」「娘」「息子」について、「本当の」と組み合わせて用いられる例をそれぞれ分析していく。

２－１　「家族」

「本当の家族」が表すのは、多くの例において父母や親と呼ばれる人間とその子供の血縁関係に基礎をおいた共同生活をする人間のまとまりとしての「家族」である。こうした存在は本来、単に「家族」と聞いた場合に多くの人が思い浮かべるものであり、特に理由がなければ「本当の」という形容は必要ないはずのものである。

BCCWJ コーパスにおいて「家族」という語彙の前に「本当の」という語がつく場合は、12 例あり、そこから外国語から訳したもの 2 例を除くと 10 例となる。この内 7 例は血縁関係を基準に「家族」カテゴリーに組み入れるもので、3 例は血縁関係以外の精神的つながりなどの性質を持つ、理想的な「家族」カテゴリーの中心的成員を指し示すものとなっている。

「本当の」が「家族」の前につくのには２種類の理由がある。それは、先に 2a、2b として挙げた「本当の」の意味用法が求められる状況があるということである。その状況は話者が感じるものであり、次のように表される。

「本当の」が必要とされる状況

1. カテゴリーの境界が話者に意識され、その境界より内側に入る事を示す必要がある。
2. カテゴリーの目立つ特質が話者に意識され、その特質を持つことを示す必要がある。

話題となる「家族」の他に「家族」のような存在が何らかの基準を巡って対比的にある状況においては、対比的な「家族」のような存在を排除し、話題の「家族」を「家族」カテゴリーの中に成員として入れ込む必要が生じる。これは上の１の状況であり、この状況で「本当の」が 2a の用法で用いられる。

次の例（５）では、「本当の家族」が表す「家族」と「ホストファミリー」が表す「家族」が対比的に捉えられている。この２者の内「家族」カテゴリーに正しい成員として入れ込まれるのは、「本当の家族」と呼ばれる「家族」であり、「ホストファミリー」は「家族」カテゴリーから排除されている。

（５）本当の家族のように接してくれるホストファミリー
（広報きりしま）

（５）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図３のように表される。

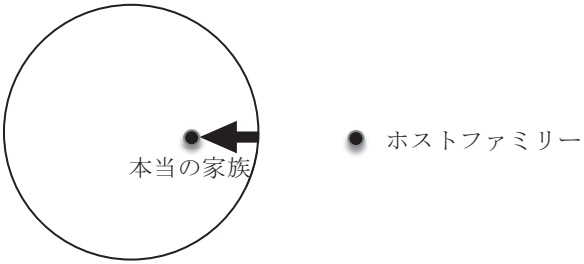

図３

（５）における「本当の」は、「本当の家族」と呼ばれる「家族」を、「家族」カテゴリー境界の内側に組み入れる働きをしていると言える。

特に対比的なカテゴリー成員候補が存在せず、ただカテゴリーの目立つ性質を有しているがためにカテゴリーに組み込まれる２の状況では、「本当の」が 2b の用法で用いられる。次に挙げる（６）の例で「本当の家族」が表すのは、「理想的な家族」である。先の（４）（５）の例で見られた血縁関係という基準による境界は、（６）の「家族」カテゴリーを規定するものではない。

（６）瞳ちゃんはお父さんたちに・・・家族とは・・・今まで勝太郎さんがそして子供たちが本当の家族になろうと努力してきた話をそしてなにもしないで・・・何の努力もしないで家族は作れないと瞳ちゃんはお

父さんとお母さんに言います　（Yahoo!ブログ）

（６）に見られる「家族」は血縁関係のない里親と里子が、血縁関係に頼らず、強い絆で結ばれた人間関係を築き、努力して作り上げていく「家族」である。「強い絆で結ばれた人間関係を有する事」が、「家族」カテゴリーの目立つ性質として捉えられ、「本当の家族」はこの目立つ性質を充分に備える「家族」カテゴリーの中心的成員を示している。

（６）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図４のように図示される。「現在の家族」は「理想的な家族」にはまだ及ばず、「理想的な家族」になることを目指している。「理想的な家族」は「家族」カテゴリーの中心に位置するプロトタイプとしてのカテゴリーの成員であり、「強い絆で結ばれる」というカテゴリーに目立つ性質を満たす。「本当の」という語彙はこの状況で起きているカテゴリー化において「理想的な家族」の求心力を示し、「家族」カテゴリーの「中心的成員」を求心的に指し示す働きをしていると言える。

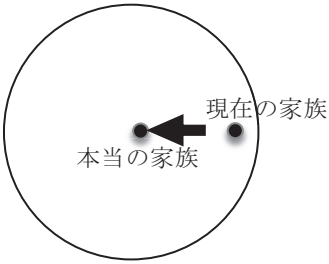

図４

次の（７）でも「本当の家族」は「理想的な家族像」を表している。

（７）一つ屋根の下で食べて寝て生活をともにしてるけど、波風ひとつ立たない表面的な家族だったと思う。「ボクたち家族がどう生きていったらいいのか」「生き方やお互いの考え方を話しあうこと」がなかったんです。ボクは、それが普通の家族だと思っていたんですけど、参究塾に来てはじめて自分の家族関係に問題があることに気づいたんです。「親子なのになぜお互いがこころを開いて話しあえないのか」「家族の問題をテーブルの上にだして話しあえない家族」って、本当の家族と言えるのだろうかと考えるようになったんです。　（橋本　法明）

（７）では「生き方やお互いの考え方を話し合う」「お互いがこころを開いて話し合う」「家族の問題をテーブルの上にだして話しあえる」といった家族を「理想的な家族」として、これを「本当の家族」と表現している。やはり「本当の」はここで、「家族」カテゴリーの「中心的成員」を求心的に指し示す働きをしている。

（７）では「表面的な家族」や「普通の家族」が「本当の家族」に先行して出てくるが、この２つの表現は、「家族」としては認めた表現であり、（６）の「ホストファミリー」のように「家族」カテゴリーから排除してはいない。「表面的な家族」も「普通の家族」も「本当の家族」も全て「家族」カテゴリーに属しており、ただ「本当の家族」だけが、「家族」カテゴリーの中心に位置するのである。（７）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図５のように図示される。「本当の」という語彙はやはり「理想的な家族」への求心力を示している。

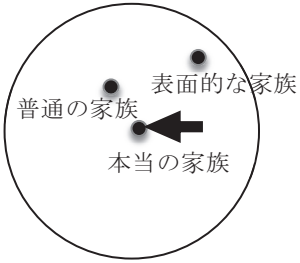

図５

次の（８）では、結婚という法制度による「家族」の捉え方に対して、これを「本当の家族」ではないと反論している。わざわざ「家族だ」と口に出して言う必要がないような精神的につながりの強い家族を「本当の家族」とする。

（８）「結婚してうちの家の人間になったんだから」「家族なんだから」というかもしれませんが本当の家族ならわざわざ口に出していいません。
（Yahoo!知恵袋）

（８）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図６のように表される。

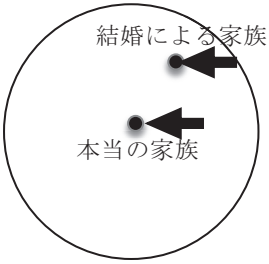

図６

「結婚してうちの家の人間になったんだから」「家族なんだから」と発言する人物が抱く「家族」カテゴリーは、「法律上のつながり」という基準を境界とする。しかしこれを聞いた（８）の筆者は、「強い絆で結ばれた人間関係を有する事」を目立つ性質とする「家族」カテゴリーを心に抱いている。筆者にとって、結婚によって形成された「家族」は「家族」カテゴリーの周辺付近にかろうじて組み込まれるかもしれないが、「家族」カテゴリーの中心を占める「強い絆で結ばれた人間関係を有する」「家族」、つまり「本当の家族」には遠く及ばない。「家族なんだから」と「わざわざ口に出して言う」のは、ここで言う「家族」が「家族」カテゴリーの境界付近にあり、カテゴリー成員としては不安定な位置を占めているからであって、「家族」カテゴリーの中心に安定した位置を占める「本当の家族」であれば、「わざわざ口に出して言う」必要もないのである。

２−２　「母親」

「本当の母親」が表すのは、「本当の家族」の場合と同様に、血縁関係に基づく人物を表す例が多く見られる。BCCWJ コーパスにおいて「母親」あるいは「母」「母さん」などの語の前に「本当の」という語がつく場合は、全部で 13 例あり、この内外国語から訳したものが 1 例。残りの 12 例のうち血縁関係を表すのは 7 例で、他の 5 例は血縁関係以外の性質により「本当の」「母親」であるとしている。

「本当の母親」が血縁関係の母を表す場合には、血縁関係のない、母のようでありながら母でないもう一人の人物が対比的に存在することが多い。次の（９）（１０）は共にその例である。

（９）藤壺は光源氏にとって、初めは義母という存在でした。三歳で本当の母である桐壺更衣を失った光源氏にとって、父・桐壺帝の後妻となり、八歳年上で容姿も母に似た藤壺は、甘えられる新しい母のような存在でした。　（宇治市政だより）

（１０）八ツぐらいの時であったが、母は私に手を焼き、お前は私の子供ではない、貰い子だと言った。そのときの私の嬉しかったこと。この鬼婆アの子供ではなかった、という発見は私の胸をふくらませ、私は一人のとき、そして寝床へはいったとき、どこかにいる本当の母を考えて、いつも幸福であった。　（坂口　安吾）

（９）で「本当の母」は生みの母である桐壺更衣であり、これに対比する形で藤壺という「義母」が「母のような存在」として捉えられている。「母のような」という表現は、この人物を「母」に近いが「母」ではないと捉えていることを示している。藤壺という「義母」は「母」カテゴリーには含まれないのである。（９）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図７のように表される。

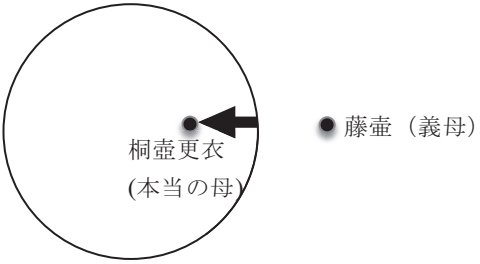

図７

（１０）では実際には血縁関係のある人物の「お前は私の子供ではない」「貰い子だ」という血縁関係を否定する発言を受けて、子はこの人物を「本当の母」ではないと解釈する。これまで「母」と認識してきた人物がこの子の持つ「母」カテゴリーから外へと排除されることになる。替わりに、どこかにいるはずの「本当の母」が「母親」カテゴリーの中に存在することになる。（１０）において「本当の母」は、血縁関係の成立する母のことであり、目の前で血縁関係を否定する鬼婆アのような母とは対比するものとして捉えられているのである。（１０）で起きているカテゴリー化の過程は、次の図８のように表される。

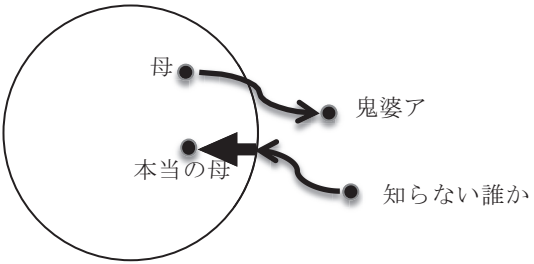

図８

（１０）では「母親」カテゴリーの境界をめぐり、２種類の存在が入れ替わっている。ここで「母親」カテゴリーの境界を成すのは、血縁関係の有無である。

（９）（１０）で「本当の母」は血縁関係を基礎にした「母親」を表していたが、この表現もやはり「本当の家族」と同様、血縁関係に基づかない人物を表すことがある。次に挙げる（１１）はその例である。

（１１）そうやってお子さん泣いてきても、お母さんがあくまでも、正しい判断してやる。正しい考え方で認めてあげるわけですよ。そうすりゃ、子どもさんも納得いくわけ。…　それがほんとの母さん。

（坂東　義教）

（１１）で「母親」として重要な要件とされるのは、子供への適切な対応ができることであり、その要件を満たす人物が「ほんとの母さん」とされている。「ほんとの母さん」つまり「本当の母親」が表すのは、「理想的な母親」であり、「本当の」という語彙が「子供への適切な対応ができる理想的な母親」を求心的に指し示し、この「理想的な母親」を中心とする「母親」カテゴリーを形成しているのである。

（１１）で起きているカテゴリー化は次の図９のように表すことができる。

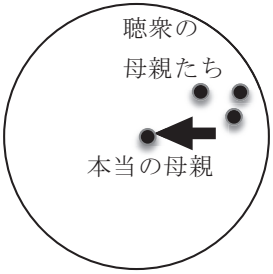

図９

（１１）の話を聞く母親たちは「母親」カテゴリーの中に含まれてはいるが、「母親」カテゴリーの中心に位置する「子供への適切な対応ができる理想的な母親」にはまだ達することができていないと捉えられている。

（９）（１０）における「血縁関係を持つ」という母親としての性質と、（１１）における「子供への適切な対応ができる」という母親としての性質は、共に母親としての特徴的な性質として認められるが、カテゴリー化においては、この２つの性質は異なる働きをしている。（９）（１０）における「血縁関係を持つ」という性質は、「母親」カテゴリーに含まれるか含まれないかというカテゴリー成員としての判別の基準となり、この性質を持たないものを「母親」カテゴリーから排除する力を持つが、（１１）における「子供への適切な対応ができる」という性質は、聴衆である母親達を「母親」カテゴリーから排除するものではない。聴衆の母親達は、「母親」カテゴリーの成員でありながら、更に「母親」カテゴリーの中心へ、「子供への適切な対応ができる」理想的な母親へと引きつけられているのである。

次の（１２）（１３）の例でも「本当の母親」は血縁関係に基づいた母親ではない。血縁関係とは別の、母親として理想的であり目立つ性質が、「母親」カテゴリーの重要な要因となっている。

（１２）春日局の病のシーン、上様の棒読みの「逝くなー」とか「そなたが本当の母上じゃー」とか感動的で本気で号泣していました。

（Yahoo!知恵袋）

（１３）ふたりの女がひとりの子を中に争う。両方とも、この子は私の子だと言い張る。決しかねた時に、大岡越前守は、その子どもを女の間に

立てて両方から手を持たせて引っ張りっこをさせました。自分の子だったら自分で取ればよいと言うのです。しかし、両側から引っ張られるので、子どもは悲鳴を上げる。ひとりの女はその子どもの泣き声に耐えかねて手を放してしまう。大岡越前守は、その放した女こそ本当の母親なのだと判決を下す。　（加藤　常昭）

（１２）で「本当の母上」とされるのは「春日局」、つまり「上様」にとっては「育ての母親」であり「精神的な絆で強く結ばれた人物」である。やはり血縁関係以外の要因によって「母親」カテゴリーの中心に位置する「母親」カテゴリーのプロトタイプのカテゴリー成員を、「本当の」という語彙が求心的に指し示している。「上様」の意識の中では、「精神的な絆で強く結ばれた、育ての母親」を中心とする「母親」カテゴリーが形成されている。

（１３）で「本当の母親」が表すのは「大岡越前」の意識の中で形成されている「母親」カテゴリーの中心となる母親像である。一人の子どもを２人で引っ張りっこして子どもが悲鳴を上げた時に、その子どもの泣き声に耐えかねて手を放してしまう人間は、「母親」カテゴリーの中心に位置すべき人間として「本当の母親」と指し示される。一方、子どもの悲鳴にも構わずに子どもを引っ張り続ける人間は、「本当の母親」が指し示す「母親」カテゴリーの中心から遠ざけられることになる。

（１２）（１３）の例は、基本的には（１１）の例と同様の、中心的カテゴリー成員を求心力としてまとまりを持つカテゴリー構造をしていると考えられるが、大きく異なる点が２つ見られる。それは、カテゴリーから排除される人物が存在する事実と、カテゴリーそのものが変容するという事実である。

明示されることはないが、（１２）では生母の存在が読み取れる。本来ならば血縁関係のある生母が「母親」カテゴリーの正当な成員として捉えられるはずである。ところが、「養育する」であるとか「精神的な絆で強く結ばれている」といった「母親」として重要かつ目立つ性質を備えた人物をカテゴリーの中心的成員とする「母親」カテゴリーが「上様」の意識の中で新たに形成される。その結果、生母でない春日局が新たな「母親」カテゴリーの中心に位置することになり、生母は「母親」カテゴリーの中心からは遠く離れた存在であると認識されることになるのである。この場合、生母は「母親」カテゴリーの中から排除されている可能性がある。こうした（１２）のカテゴリー化の形成およびカテゴリーの変容は次の図１０のように表される。

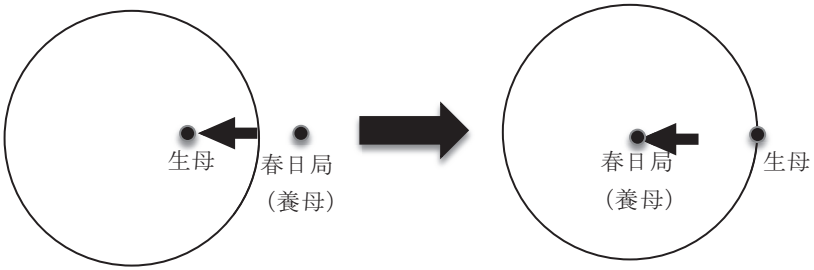

図１０

もともとは図１０の左のように、血縁関係のあるなしを境界とする「母親」カテゴリーであったものが、春日局を慕う気持ちの高まりとともに、右のように「精神的な絆で強く結ばれている」という性質を備えたものを中心とする「母親」カテゴリーへと変容する。この「母親」カテゴリーにおいては春日局がカテゴリーの中心に位置することになり、生母はカテゴリーの端に追いやられる。

（１３）においてもはじめの段階での「母親」カテゴリーは血縁関係のあるなしを境界とするものであったと考えられる。ふたりの女がひとりの子を争って、この子は私の子だと言い張った時、それは母と子の血縁関係を主張していた。ところが、大岡越前守はこの「母親」カテゴリーを、いったん「子への強い愛情を持つ」という「母親」として理想的で目立つ性質を持つ人物を中心とするカテゴリーへと作り替えてしまうのである。子どもの泣き声に耐えかねて手を放してしまう人間がこの「子への強い愛情を持つ」理想的な母親として、「母親」カテゴリーの中心に位置づけられる。その後、もともとの血縁関係で判別される「母親」カテゴリーと、後に現れる「子への強い愛情を持つ」理想的で目立つ性質を求心力とするカテゴリーは重ね合わされる。「子への強い愛情を持つ」理想的で目立つ性質を求心力とする「母親」カテゴリーに属する「母親」は、血縁関係で判別される「母親」カテゴリーにおいても「母親」であるとされてしまうのである。こうしたカテゴリー化の過程は次の図１１のように図示される。

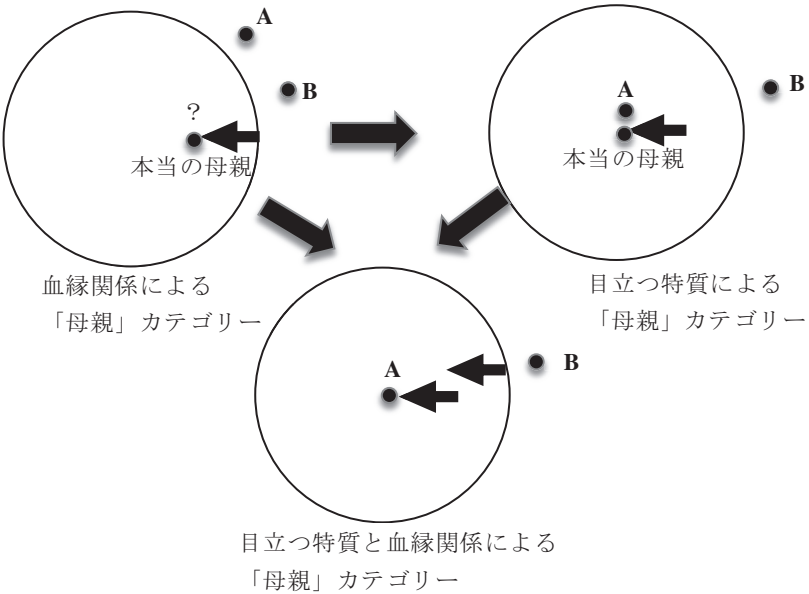

図１１

ふたりの女（A,B で示す）がこの子は私の子だと言い争う時の「母親」カテゴリーは、図１１の左上の血縁関係による「母親」カテゴリーであり、血縁関係のあるかないかという条件により、ふたりの女 A,B はカテゴリーの内と外に振り分けられるべき状況にある。そこで大岡越前が持ち出した「母親」カテゴリーが、図１１の右上の母親として目立つ特質による「母親」カテゴリーである。この場合、母親としての目立つ特質は子への愛情となる。この種のカテゴリーに照らし合わせると、子どもの泣き声に耐えかねて手を放してしまう女 A が、カテゴリーの中心に位置すべきカテゴリー成員として認められることになる。もう一人の女 B はこの母親としての特質を持たないが故に、この特質による「母親」カテゴリーには組み入れられない。大岡越前は次に、この目立つ特質による「母親」カテゴリーとカテゴリー成員との関係を、当初の、血縁関係による「母親」カテゴリーに持ち込み当てはめる。結果、母親としての特質による「母親」カテゴリーの成員として認められた女 A を、血縁関係による「母親」カテゴリーにおいてもその成員とすることになる。これが図１１の下に示

す、２種類のカテゴリーが融合した状態である。

２−３　「父親」

「父親」あるいは「父」「父さん」などの語の前に「本当の」という語がつく場合は、BCCWJ コーパスにおいて 23 例あり、そこから外国語から訳したもの５例を除くと 15 例となる。この内 14 例は、血縁関係を表すものとなっている。次に挙げる（１４）もその例である。

（１４）山荘の主人っていうのは、ふたりのおじょうさんのほんとうの父親でなく、とおい親せきからあずかっていたんだそうだけど」「うん、うん、それから」「そのふたりのおじょうさんのほんとうの両親は、ふたりが赤んぼうのころ亡くなって、ずーっとその山荘の主人が親がわりをしてたんだって」

（１４）に登場する「山荘の主人」は、「ほんとうの父親」ではない。「親がわり」という表現もこの人物が親ではないことを示している。「父親」カテゴリーの外に位置づけられているのである。これを図示すると次の図１２のようになる。

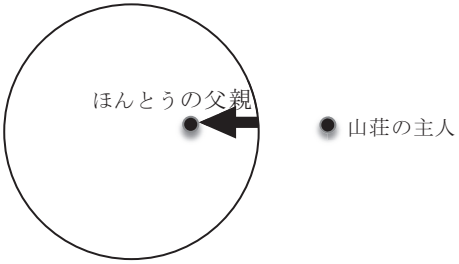

図１２

円は「父親」カテゴリーを表すが、「山荘の主人」はこの枠から外へ位置づけられ、この枠を成す基準である血縁関係の存在という条件を満たす者だけが、この「父親」カテゴリーの内側へと位置づけられるのである。

次の例（１５）においても「本当の父親」は血縁関係のある人物を指示しているのだが、この文章の前半ではエディプスはこの血縁関係に気づいてはおらず、現実には同一の人物が「父親」カテゴリーの外に位置づけられている。「本

当の父親」という表現は、この父親とは思っていなかった存在との対比、また自分を拾い育ててくれた「父親」と思っていた人物との対比をもって用いられていると判断される。

（１５）その子どもは、隣の国の王様に拾われ、育てられることになります。成長したエディプスは出生の秘密を知り「お前は父親を殺し、母と結婚する」という神託を受け、旅に出ることにしました。ところが、たまたま旅の途中で出会って果たし合いになり、ある国の王様を殺してしまいます。しかもスフィンクスを倒した英雄ということで、その国の新しい王様として迎えられ、自分が殺した王の后を妻に迎えることになるのです。実は、その、果たし合いで殺した相手が本当の父親で、妻になったのは母親でした。それに気づいたエディプスは罪の意識にさいなまれて自分の目をつぶしてしまいます…。　（和田　秀樹）

（１５）で起きている「父親」に関するカテゴリー化の過程を図示すると次の図１３のようになる。

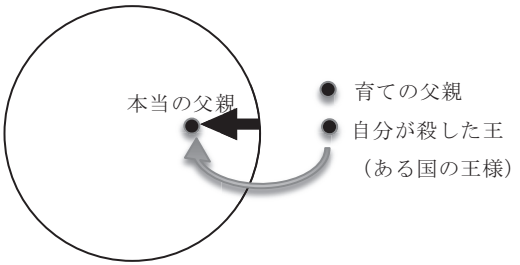

図１３

エディプスの認識において始めは「父親」カテゴリーの外に置かれていた「ある国の王様」が、この人物との父子の血縁関係を知ったことで、この性質をカテゴリーの境界を成す基準として、カテゴリーの中に入れ込まれる。このカテゴリーに入れ込もうとするカテゴリー化の力が「本当の」という語彙に反映されているのである。「本当の父親」という表現は、果たし合いにより殺した王との対比に加え、更に、育ての親である隣の国の王様との対比も反映している。

次の例（１６）には、父子の血縁関係がある人物とない人物について、それ

ぞれに複数の名称が用いられる。血縁関係がある人物には「実の父」「ほんとうの父親」、血縁関係がない人物には「養父」「義父」が対応している。

（１６）「実の父は小さいときに死にまして、私は養父に育てられたんです。四人姉妹を連れて、母は当時大工をしていた義父と再婚したんです。義父は私たち四人をわが子のようにかわいがってくれたんですよ。ほんとうの父親より義父のほうがずっとやさしかったですね。
（宜保　愛子）

「実の」「養～」「義～」は、どれも父親である具体的な拠り所を明示した表現である。「実の」は血縁関係があることを示し、「養～」は養育の関係があることを示し、また「義～」は法律的関係があることを示している。これに対して、「ほんとうの父親」はそうした父親としての拠り所を具体的に限定する表現ではない。「実の父」「養父」「義父」が「父親」カテゴリーの中の下位カテゴリーを表しているのに対して、「ほんとうの父親」は「父親」カテゴリーそのものを表している。「ほんとうの父親」という表現が用いられた段階で、それまでは「父親」カテゴリーに入っていた他の成員は外に排除されてしまう。

（１６）で起きる「父親」をめぐるカテゴリー化の変化は次の図１４のように表される。

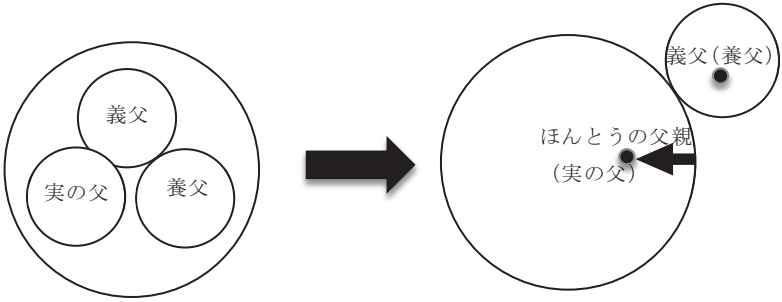

図１４

「父親」カテゴリー t1　　「父親」カテゴリー t2

今回 BCCWJ コーパスより収集した「本当の父」の例の中で、血縁関係以外の性質を表すものは、外国語から訳したものを除けば次の（１７）１例のみだった。

（１７）主人が２度も私を裏切り現在別居中です。１歳の息子と二十四時間二人っきり・・・。精神的にも、育児も疲れてきました・・・。大きな声で泣き叫びたい私に、みなさん喝を入れて下さい！！！どんな厳しいことでも構いません！！私も二度裏切られたけど、踏ん張って実家には帰りませんでした。その都度ぶつかって今があります。だから、決してあせらないで^^旦那は子供３人目にしてようやく本当の父親になってくれました。結婚十二年今やっと感謝の日々です。

(Yahoo!知恵袋)

ここでは「本当の父親」という表現が、血縁関係ではなく、精神的な意味で父親であること、理想的な「父親」であることを表している。「旦那」と呼ばれる人物は血縁関係としては３人の子どもの「父親」でありながら、過去には家族に対して「父親」の役割を果たしていなかったものが、今は「父親」としての役割を果たし精神的な結びつきを家族と結んでいると読み取れる。

（１７）における「父親」カテゴリーは次の図１５のように表される。

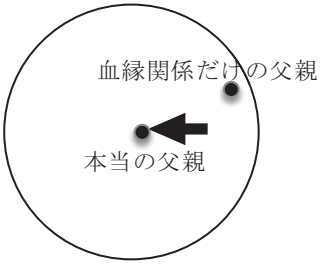

図１５

「旦那」とされる人物は話者からこれまで「父親」として認められていたのかどうかについては不明だが、「父親」カテゴリーに組み込まれていたとしても、それはかろうじてカテゴリーの周辺に位置づけられるカテゴリー成員であったと考えられる。それが今では、家族ときちんと関わり子ども達と精神的なつながりを築いた「父親」と認められている。「父親」カテゴリーの中心的な成員として認められているのである。

２−４　「親」

「親」の前に「本当の」がつく例は BCCWJ コーパスにおいて 17 例あり、内 16 例は血縁関係に基づく。ただ 1 例のみで、理想的な「親」が表されている。

次の例（１８）では血縁関係による「親」を「本当の親」としている。

（１８）アニメのホイッスルとハングリーハートを見ていたら、なんか設定で似ているところがあります。それは、二人とも今の両親は本当の親でなく、本当のお父さんはサッカー選手で、ある日両親そろって交通事故で死んでしまった、というところです。

（一部改変　Yahoo!知恵袋）

（１８）において「今の両親」とされる人物は、「本当の親」ではないとして、「親」カテゴリーから排除される。排除される理由は、親子としての血縁関係がないという事実である。血縁関係のあるなしが、ここでは「親」カテゴリーの境界を成す基準となっている。

次の例（１９）においては、「血縁関係」といっても更に厳密な「遺伝的関係」が「親」カテゴリーの境界を成す基準となっている。「養父母」「法的な関係による親」は「本当の」「親」とは認められず、「親」カテゴリーから排除されているのである。

（１９）千九百八十年代の半ばに、人工受精で生まれた子供に対し、本当の親が誰であるかを知る権利を法的に認めた。それが人間としての基本的な人権だと判断したからだ。遺伝的な親が誰であるか知ったうえで、養父母の法的な子供だという自分を認識することが、出自を包み隠してしまうよりも、健全な親子関係を築きやすいのだという。

（帚木　蓬生）

次の例（２０）では、「親」の理想が語られている。ここで「本当の親」とされるのは、「親」カテゴリーの中心に位置づけられる理想的な「親」となる。

（２０）叩いてはいけない時、叩いてでも教え込まなければいけない時があるんだ。それは何を基準に、どの程度にするか？　それを考えるのが本当の親なんだ。大人になって親になることは簡単でも、親であり続けて親の責任を全うすることは、親としても大変なことなんだ。

（内海正彦）

（２０）における「親」のカテゴリー化の過程は次の図１６により説明できる。

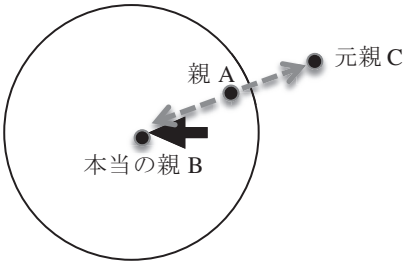

図１６

大人になって子どもを持ち「親」となった人物はとりあえず「血縁関係」の成立により「親」カテゴリーに組み込まれ、そのカテゴリー成員になるのだが、まだカテゴリーの中心的成員ではない。（親 A）「親」としてすべき事をして、「親」としての責任を全うすることで、この成員は「親」カテゴリーの中心的成員となれる。（本当の親 B）一方、こうした「親」としての責任ある行動がとれなければ、「親」であり続ける事もできなくなる。つまり「親」カテゴリーから排除されることもあり得るのである。（元親 C）

（２０）における「親であり続けて…」という表現は、親であり続けない可能性を認めたものであり、これは「血縁関係」に基づく「親」カテゴリーが絶対普遍のものでないことを示している。

図１６のカテゴリー化の過程においては、「親」カテゴリーの境界の基準が変化する。はじめの基準は「血縁関係」であったものが、「親」としての行動をするかどうかという基準に交替し、「親」カテゴリーそのものが変容している。そこで元の「親」カテゴリーの成員として認められていた人物が、新しい「親」カテゴリーに対しては成員でないものとして、カテゴリーから排除されることになるのである。

２−５　「子供」

「子供」という語彙には、「親」に対する「子供」という意味用法と、「大人」に対する成長しきっていない「子供」という意味用法があるが、本研究では「親」に対する「子供」の場合のみを扱うこととする。BCCWJ コーパスに見られる親子関係を表す「本当の子」「本当の子供」の例は 14 例あるが、内１例

の外国語からの訳のものも含めて全て血縁関係を満たすものばかりである。次に挙げる２つの例（２１）（２２）も、血縁関係のない存在に対比する形で血縁関係のある存在を、「本当の子供」として表している。

（２１）「冬子さんが実の娘でなかったように、夏子さんだって本当の子供かどうかわからないわ。家元だって疑っていたからこそ、親子鑑定をしようとしていた矢先でしょう？　（山村　美紗）

（２２）とにかくこの制度は児童福祉という面を重点的に置いた制度で、そして子供が、養い親の方で自分の本当の子供が生まれたからといって簡単に追い出していくというようなことをやめさせるためにはこれ以外ないというのが審議会の意向ではなかったかと、こう承知をいたしております。　（国会会議録）

（２１）では「実の娘ではなかった」存在に対比する形で、「本当の子供」が登場する。血縁関係のあるなしが「本当の子供」であるかどうかを決定する要因であり、「子供」カテゴリーの境界を成す基準であることが、「親子鑑定」が引き合いに出される事からも明らかである。

（２２）では、「養い親」を持つ「子供」に対比する形で「本当の子供」が登場する。「本当の子供」は「生まれる」という血縁関係を含む性質を備えている。

「本当の子供」という表現に用いられる「本当の」という部分は、「子供」カテゴリーの境界を成す基準から内側であることを示すものであり、またその基準となるのは、ほぼ全ての場合に「血縁関係」のあるなしであることが明らかとなった。

２−６　「娘」

BCCWJ コーパスには「本当の娘」の例も、外国語からの訳の１例を含めても 4 例しかなく、それは全て血縁関係を満たすものばかりだ。次に挙げる例（２３）も、血縁関係のない「養女」という存在に対比する形で血縁関係のある存在を、「本当の娘」として表している。

（２３）将軍家から養女もしくは本当の娘を諸候にくれる　（三田村　鳶魚）

（２３）での「娘」カテゴリーの境界は「血縁関係」があるという基準により成立しており、この境界をめぐって外側に「養女」が追いやられ、「本当の」という言葉により血縁関係のある「娘」がカテゴリーの内側に組み込まれる。

次の例（２４）では、「魔導士バスター」と「アン・シャル」「メイ・フィス」は単純な血縁関係でつながってはいない。ここで「本当の娘」と言う根拠は「遺伝子のつながり」であり、この「遺伝子のつながり」という基準を境界として、「娘」カテゴリーが成立しているのである。

（２４）魔導師バスターは自分の遺伝子をベースにアン・シャルとメイ・フィスを創った。だから本当の娘でもあると、彼は言っていた。
（神野　淳一）

「娘」カテゴリーの境界を成す基準は、常に一定のものではなく、コンテクストにより異なるものが設定され得る事が、（２３）（２４）の比較から明らかである。

２−７　「息子」

BCCWJ コーパスには「本当の息子」の例は、外国語からの訳の１例を含めても３例しかなかったのだが、それは全て血縁関係を満たすものばかりだった。次に挙げる例（２５）も、血縁関係のない存在に対比する形で血縁関係のある存在を、「本当の息子」として表している。

（２５）パパはおじいちゃんが大好きだった。ママはあまり石に興味がなかったので、パパとママが結婚することになると、おじいちゃんは会うたびにパパに石のことを教えてくれた。本当の息子のようにね。
（梨木　香歩）

（２５）においては「ママ」と呼ばれる人物が「おじいちゃん」の実の娘であり、その夫である「パパ」は「おじいちゃん」にとって「義理の息子」となる。この直接的な血縁関係のない「義理の息子」は、「おじいちゃん」と人間同士のつながり方としては密であり、「息子」としての性質を備えてはいるのだが、それでもやはり血縁関係のある「本当の息子」とは区別されているのである。

「息子」カテゴリーの境界は「血縁関係」があるという基準で成立し、「本当の」という語彙はこの基準より内側にカテゴリー成員を入れ込むのである。

３章　「家族」に関するカテゴリー化の共通点と相違点

前章では「家族」に関する語彙について、「本当の」という語彙が前につく表現を収集し、そのカテゴリー化を分析したが、いずれも、第１章で主張したカテゴリー化に合致するものであった。つまり、「本当の」という語彙は、「家族」「母親」「父親」「子供」「娘」「息子」といった語彙カテゴリーの形成過程において、カテゴリー成員の候補をカテゴリーの中に組み込む２種類の力を反映するものとなっていた。家族に関する語彙のカテゴリー化において、カテゴリーの境界より内側に振り入れる分別力と、カテゴリーの中心的成員として位置づける求心力が働いているのである。

カテゴリーの分別力が働く基準点や求心力が向かう中心点については、前後のコンテクストを分析する事によりその性質が明らかになった。分別力が働く基準点は、更に細かく遺伝子関係を選択する例も含めて、ほとんどが血縁関係である。また求心力が向かうカテゴリーの中心点は、明確に観察される例は多くはないが､観察される場合には､話者が求める理想的な性質が位置を占める。

第１章で論じた「本当の馬鹿」の例から分かるように、一般的なカテゴリー化における求心的力が向かう先であるカテゴリーの中心点は、必ずしも理想的な性質にはならない。「馬鹿」の理想的な性質など普通は考えられないからである。「家族」に限らずカテゴリー化一般について語る場合には、「目立つ」性質が中心に来るという説明が妥当であると考えられる。しかし家族に関する語彙については、そのカテゴリーの中心点となる「目立つ性質」は全て理想的性質であった。この事実は注目すべき点であろう。家族に関する語彙のカテゴリー化については、分別力の基準は血縁関係であり、求心力の向かうカテゴリー中心点は理想的性質ということでほぼ一致したのである。

基本的なカテゴリー化の過程については共通する点が多かったのだが、そこで働く力の種類は、語彙により大きな差が見られた。その数を表にまとめると次の表１のようになる。ただし、ここでは外国語からの訳の例は除外した。

	家族	母親	父親	親	子供	娘	息子
分別力（血縁）	7	7	１４	１６	１３	3	2
求心力（理想）	3	5	1	1	0	0	0

表１

いずれの語彙も血縁の有無をカテゴリー境界の基準として分別力が働く例が

多いという点で共通している。ただし「母親」、次いで「家族」については、その理想像を目標として求心力が働くカテゴリー形成もかなり見られる。ここで明らかになるのは、家族との精神的な関係性や人間性について理想が強く求められるのは「母親」ばかりということだ。次に「家族」、そしてわずかに「親」、「父親」。「娘」や「息子」に到っては家族との関係性についての理想像を求められることはまずない。家族に関する語彙にとって血縁関係というのは非常に重要な要因となってはいるが、特に「父親」や「親子」を規定するのは、血のつながりの有無ばかりと言える。日本語圏の文化における家族の捉え方を、「本当の～」という表現が示す語彙カテゴリー形成の過程が物語っているのである。

結語

本稿では、日本語を対象に「本当の」という語彙を鍵として、「家族」と「母親」や「父親」など家族の構成員についてのカテゴリー化について探求を試みた。明らかになったのは、カテゴリー化の仕組みと、日本語圏における「家族」の捉え方である。

まず、カテゴリー化の仕組みについては、山田(2010)(2012)で検討したのとほぼ同様に、２種類の作用が起きている事が改めて確認された。何らかの基準を境界とした分別力が作用する場合と、カテゴリーとして何らかの目立つ特質を目標とする求心力が作用する場合とが見られた。この２種類の作用は、話者が発話状況において注目しているカテゴリーの特質と、その特質の捉え方により決定する。

複数のカテゴリー成員候補が存在する時には、これをカテゴリーの内と外に分別するための基準を話者は強く意識することになり、分別力が働く。また、話者がカテゴリーの特質に注目している時には、この特質を備えたものをカテゴリー成員としてカテゴリーの中に組み込む求心力が働くことになる。さらに、話者の意識の変化に応じてカテゴリーは変容する。カテゴリーは固定したものでなく、話者による状況の捉え方により、動的に変化し続けるものなのである。

また、本研究で日本語圏における「家族」の捉え方が明らかになった。今回扱った例文数はまだ少ないので、今後更に多くの例を調査し、また他の言語圏の事象とも比較する必要があるが、現段階でもその傾向は明らかになったと考えられる。日本語圏の「家族」においては、「血縁関係」を重視し、これを基準としてカテゴリーの成員を決定する場合が多い。ただ「母親」と「家族」に関しては、「精神的な強いつながり」を持つものを、カテゴリーの中心の理想

像とする場合が少なくなかった。「家族」において「父親」と「母親」は共に子供に対する親であり、ただ「男女」という性差があるだけの語彙体系を成してはいるが、そのカテゴリー形成のありようは同質のものでないことが明らかである。日本語圏における「家族」の捉え方では、家族の構成員によって、大きな偏りが存在している。

参考文献

Barsalou, Lawrence W. (1983) “Ad Hoc Categories,” *Memory and Cognition* 11, 211-227.

Barsalou, Lawrence W. (1993) “Flexibility, Structure, and Linguistic Vagary in Concepts: Manifestations of a Compositional System of Perceptual Symbols,” *Theories of Memory*, ed. by Collins, Alan F., Susan E. Gathercole, Martin A. Conway and Peter E. Morris, 29-101, Lawrence Erlbaum Assoc.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*: *What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.

MacLaury, Robert E. (1995) “Vantage Theory,” *Language and the Cognitive Construal of the World,* ed. by John R. Taylor and Robert E. MacLaury, 231-276, Mouton de Gruyter, Berlin.

山田 仁子（2010） 「カテゴリーを形成する 2 種類のベクトル, -「真(ま)+ 色彩語彙表現」の分析 -」,『徳島大学総合科学部言語文化研究』, Vol.18, 115〜130 頁

_____（2012）「カテゴリー化を促す 2 種のベクトル:Real Mother と True Mother」大橋浩 他 編『ことばとこころの探求』, 開拓社

例文の引用

日本国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)
(http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)

本研究は JSPS 科研費 25370554 の助成を受けたものである。